



■第1回ガクアルFESTA高文連軽音楽コンテスト準優勝！！



10月27日(土)、沖縄市のミュージックタウン音市場にて、第1回ガクアルFESTA高文連軽音楽コンテストが開催されました。軽音楽部にとっては高文連に加盟して記念すべき初の大会。冷たい秋風の吹きつける中、1階音広場にて県内12校から各2組ずつが思い思いのパフォーマンスを繰り広げ、熱い思いをぶつけました。我が読谷高校はトリをつとめ、1バンド目の「Funny Bunny」2年6組新垣修、2年6組花城伶武、1年4組幸地優花、1年4組仲宗根拓斗、1年7組池原妃仁子の5人が高校生らしい弾けるパフォーマンスと透き通った歌声で沸かせ、2バンド目の「千愛(せら)」3年4組上間千愛が熱い想いのこもったギターのソロ弾き歌いとトークで会場の心を鷲掴みにし、結果は見事団体の部準優勝！今後も技を磨き、音楽に向き合い、さらなる表現力を高めていくことに期待します。集合時間前早朝から集まり、ステージ設営を上間君が皆に教えながら自分達で行っている様子も印象的でした。(家庭科久高奈都子先生より)

■校内陸上競技大会大成功！！ 11月9日(金)



読谷村陸上競技場で開催しました。女子100m予選にはじまり、最後は学年別学級対抗リレーでした。学級担任や副担任、ALTのチェイス先生も出場し一生懸命に走っていました。記録への挑戦、クラスの一致団結、生徒一人ひとりの協調性を高めるなど、本大会の目的も達成できた大会だったと思います。大会の準備、当日の運営にあたった皆さんお疲れ様でした。

■進路講演会 11月6日(火)

講師：青山和浩先生 東京大学大学院工学系研究科
岩田剛治先生 大阪大学大学院工学研究科

演題：「未来を創るシステムデザイン」

はじめに青山先生から、現在社会では、人口、食料、地球温暖化など様々な課題の解決が求められていますが、それはシステムの問題です。そのシステムについて考える学問がシステム工学です、ということや、理学と工学の違いとして「工学は、未来を発明する。理学は、現実を発見する。」また、物事を見るときに使いたい「3つの目」として、『鳥の目(大局観を把握する)、虫の目(部分を見る)、魚の目(流れや繋がりを見る)』のお話もありとても印象に残りました。岩田先生からは、AIのことやシステムを創成する力の必要性、良い技術が必ずしも良いシステムではないこと、手段ではなく目的が大切であることなどを日本や諸外国のスマホやロケットなどのモノ造りやその考え方の違いなどを例にご講演がありました。

最後にお礼のことばとして「何が起きるか予測が難しいこれからの世の中で、生き抜く力を身に付けたい」という心強い生徒副会長花城伶武くんのあいさつがありました。

題名：『東大講義録 文明を解く』

作者：堺屋太一

通産省(現在の経産省)入省4年目の池口小太郎氏は、1964年「日本で万国博覧会を開催しよう」と提案。6年後、大阪で日本万国博覧会が開催され大成功を収める。1975年の沖縄国際海洋博覧会も同氏の提案という。1978年に通産省を退職し作家、経済評論家となる。1947年から1950年の間に生まれた人たちのことを「団塊の世代」というが、この用語は池口氏の著書である小説『団塊の世代』に由来。歴史小説『峠の群像』や『秀吉』はNHKの大河ドラマになった。1998年小淵内閣では経済企画庁長官に就任。その後、2002年に東京大学先端科学技術研究センター客員教授となり、そこでの講義をまとめたのが本書である。ペンネーム「堺屋太一」は、先祖の商人が安土桃山時代に堺から谷町に移住した際の名前を採ったという。

本書の目的は「人類の文明の由来と未来を解明すること」とあり、第I部「世界と日本の近代にいたる道」、第II部「知価社会の構造分析」で構成。その第I部から話題を紹介したい。

人類は1万年前に農業を始める。その頃の農業は土地が限定されて収穫が少ないから物不足の状態で、しかも天候など自然条件に左右されていた。くすると人間の労働よりも、条件をつくってくれる神の意志「神意」が重要になる。くその結果、目の前にある物財から目に見えない神の意志へ、空想的な存在へと興味が移っていく。くこのため、この時代につくられた像や祭器はすべて象徴的、もしくは抽象的な造形であるという。それから数千年を経て「農業改革が起こると、第一に領域国家になりました。第二に階級が誕生し、第三に交易がはじまりました」。交易がはじまるとく相手がどんな商品を出すか観察したり、く土地を改良するためにも測量し観察)する必要がある。観察をすることで、写実の技術が生まれく古代の写実美術が誕生するわけですね。くすなわち、人類の造形物は物不足のときは抽象的に、豊かになると写実的になるという。なるほど面白い。

戦国時代の武将たちが掲げた旗印についての解説も面白い。く戦国時代が百数十年も続き、「もう戦乱はこりごりだ」という意識が蔓延)していた頃、織田信長は「天下布武」、徳川家康は「欣求浄土(ごんぐじょうど)、厭離穢土(おんりえど)」を旗印とした。く戦国時代の武将の中で明確に統治ビジョンを掲げたのは織田信長と徳川家康だけで、武田信玄などはそれがないという。く武田信玄の「風林火山」は戦陣訓で、どうやって勝つかという技術論。徳川家康はく「浄土」、清められた土地とは戦争のない、秩序がはっきりした封建社会)、く「穢土」、汚らしい土地とは、まさに下克上の自由競争社会)。くその下克上の戦国時代をやめて封建社会を建てると宣言した)とある。その後、260年以上続く長期安定政権の基盤をつくった旗印は、技術論ではなく明確な統治ビジョンなのである。